委員派遣報告書

生活環境常任委員会の委員派遣調査結果について、会議規則第 101 条の規定により、下記のとおり報告する。

令和５年 12 月５日

養父市議会議長　西　田　雄　一　様

生活環境常任委員会
委員長　浄　慶　耕　造

記

１　目　　的　「農村山間地域における男女共同参画社会の実現と「女性活躍」が地域の持続に与える影響について」及び「石見銀山の観光産業化への道筋について」の管外調査のため
２　派遣場所　島根県大田市
３　実 施 日　令和５年 10 月 26 日（木）、27 日（金）
４　派遣委員　浄慶耕造、西垣　司、植村和好、藤原芳巳、中島恵子、深澤巧、川瀬　稔　以上７人
５　調査報告

（１）農村山間地域における男女共同参画社会の実現と「女性活躍」が地域の持続に与える影響について

石見銀山は、戦国時代後期から江戸時代前期にかけて最盛期を迎えた日本最大の銀山で、徳川幕府の直轄地を経て発展したが、1923（大正 12）年に閉山されている。

「石見銀山遺跡とその文化的景観」は平成 19 年に世界遺産に登録された。ユネスコは３つの登録に至った理由を明らかにしており、その１つに、「銀を運んだ街道や銀を積みだした港が残り、今でも人が住み続けている」ことを挙げている。

閉山前の大森町には約 2,000 人が暮らしていたが、閉山後は人口減少が続き、現在の人口は約 400 人となっている。その中でも大森町の人たちは、鉱山遺跡や町並みを守り、教育に生かし、暮らしを大切にしながら町を美しく息づかせてきた。

その取組の中に一人の女性経営者がいた。夫の故郷、大森町に一家で帰

郷した、松場登美さんである。「ここは何もないところ」という地元の人の言葉に反して、昔の人が大切に使っていた食器や布に心惹かれ、価値を見出した。「この町はまさに古きを活かして、新しさを創り出す舞台だ」と感じたという。

平成６年、夫と共に、服飾・生活雑貨を制作、販売する「株式会社群言堂」を創業した。現在、全国に 32 店舗を展開し、280 人が働いている。大森町の本社には約 65 人が働き、そのうち３分の２の社員がＵ・Ｉターンで大森町に移住している。

事業を支えたのは地元の女性である。衣食住の中心にいた女性たちが手作りする、日常の文化が商品化された。「一見非効率なものでも、100 年の時間で見ると効率的なものがたくさんある。モノの中にある魂を感じ取る力は女性の方が強い。男性は女性の感性を学ぶべきだ。」と登美さんは語った。効率性と便利さを求め続けた男性社会は、今、地球沸騰化と呼ばれる事態を招いている。

登美さんは「田舎に暮らす女性の意識を高め、より豊かな暮らしを考える」をテーマに、「鄙のひなまつり」というイベントを 10 年間行った。このイベントにより、この町に暮らす女性の意識は変わっていった。行動に移さない限り何も変わらない。自分ができる小さなことの積み重ねが今につながっている。

大森町の橋の傍で遊ぶ２人の外国人の子どもに出会った。後で聞けば、保育園留学（中長期、大森町に移住）の子どもだという。人口約 400 人の大森町に、この 10 年で 38 世帯が転入し、46 人の子どもが出生している。数名だった大森さくら保育園の園児は、現在 24 人まで増えた。

大森町が発信する「暮らす・生きる・働く」が多くの人を引き付け、大森町に魅力を感じた若い人たちが集まっている。

令和５年、保育所の耐震工事を機に、空き家であった渡辺家住宅の母屋に、放課後児童クラブ「おおもり児童クラブ渡辺家」が開設された。「大森町で育つということは、自然や歴史、人も含めた町全体の空気を吸って生きるということ」と、地域の教育力が意識されている。

（２）石見銀山の観光産業化への道筋について

石見銀山の世界遺産への道筋は、地域の住民が牽引した。昭和 32 年の市町村合併と同時に、全戸加入の大森町文化財保存会を発足。昭和 41 年に大森町観光開発協会発足、昭和 44 年には石見銀山遺跡愛護少年団が結成されている。大田市が「石見銀山遺跡総合整備構想」を策定したのは、それよりずっと遅れた昭和 61 年である。昭和 62 年に重要伝統的建造物群保存地

区に選定され、平成13年に世界遺産暫定リストに搭載された。これらの経過を踏まえ、市の観光政策の基本は、「住民が大切にしてきたものを観光に使わせていただいている」としている。

石見銀山エリアの観光客入込数は、世界遺産の登録を受けた平成20年には80万人を超え、狭い地域を路線バスが100往復するオーバーツーリズム現象を招き、住民の生活が脅かされる事態となった。

観光は裾野の広い総合産業であり、地域経済に良い循環を創り出す。「暮らしとにぎわい」を両立させるため、大田市の試行錯誤が始まった。駐車場から徒歩で観光する「パークアンドウォーク方式」を取り入れたが、歩くことが不自由な方（妊婦・高齢者・障がい者等）への対応のため、グリーンスローモビリティ（時速20km未満で公道を走ることができる電動車「ぎんざんカート」）を取り入れた。観光客は、徒歩、ぎんざんカート、電動自転車で町並みをめぐっている。

一時の世界遺産ブームが去り、コロナ自粛も影響して、現在の観光入込数は35万人程度となっている。古き良さを生かした文化あふれる観光地を守るため、大田市は銀山地域の来訪者数について、年間45万人をＭＡＸとして設定した。その範囲で観光消費額をアップさせ、観光産業の活性化を目指す。そのためには戦略的なマーケティングや観光地としてのブランディングが求められる。

大田市は多様な関係者と協働し、大田市ＤＭＯとして一般社団法人大田市観光協会を設立した。（一社）大田市観光協会は、地域の稼ぐ力を引き出し、地域の誇りと愛着を醸成する地域経営の視点に立った「観光地域づくり」の司令塔としての役割を担っている。